

第十一章 銀河鉄道

銀河鉄道については様々な夢物語がある。もちろん地球を駆け巡る鉄道については昔ほどではないがそれでも重要な交通手段である。今や自動車という排気ガスをまき散らす効率の悪い輸送手段が幅をきかせているが、鉄道は省エネルギーで弱者に優しい。それに何と言っても乗客に夢を与える。

自動車も人々にそれなりの夢を与えた。初めは高価で庶民には手が届かなかった自動車も経済発展で所得が上がり大量生産で安くなると「足」として定着したかに見えた。高速道路が次々と建設されたので自宅前で自動車のドアを開けて乗り込めば目的地で開ければ移動完了となる。

昔某国の国会議員が選挙になると「我が町に鉄道を」と叫びまくり地元で鉄道誘致をしたが、今や赤字ローカル路線の廃止に反対する議員はいない。

ところがヨーロッパが高速鉄道網を整備してそれまでの最高速度を時速百キロメートルから三百キロメートルに上げると、遅らせながらも中華民国も一帯一路政策のもと高速シルクロード構想を打ち出すと、スピードがさほど向上しない飛行機よりも輸送エネルギー効率のいい鉄道が脚光を浴びる。そして拠点駅から既存のローカル鉄道網と連携して利便性を高めた。

鉄道が復権を果たす。まさしく銀河鉄道が地球上で走り出すようになる。ノロはそんな夢をすでに実現するために数々の列車を設計し場合によっては製造もした。しかし、本人の興味は今両生類、爬虫類だ。

*

榊と加藤がイリライナー王国の列車製造工場に興味を示す。

「どうやらない加減なノロの情報があちらこちらで漏れているんだろうな」

加藤がすぐ否定する。

「情報はいいい加減かも知れないが、それ以上のモノをノロが造っているかもしれない」
急に榊の表情が固まる。

「宇宙戦艦や宇宙戦闘機なら分かるが、宇宙列車、宇宙自動車……」

加藤が遮る。

「つい最近まで戦艦や戦闘機はなかった。ましてや鉄道、自動車……そう戦車もなかった」

榊は目を閉じて加藤の言葉を咀嚼する。しばらくして口を開く。

「そうでもない。信長の戦艦が大坂湾から本願寺を攻撃したとか、もっと前にはローマ軍が戦車で領土を拡張したとか……」

「聞いたことがある」

加藤が納得すると榊を促す。

「おれは宇宙戦艦や宇宙戦闘機ハヤブサに目を奪われていたが、あんなモノを造れるのなら彼がとつくの昔に宇宙戦車や宇宙特急列車を造っていても不思議じゃないな」

「そうだな。時空間移動装置は宇宙自動車と言えるかもしれない。まあ何でも上に『宇宙』と付ければいいというものでもないが」

二人は苦笑するがすぐ真顔に戻す。

「もし宇宙列車というのがあればどんな列車？ 特急イリ・ライナーやウク・ライナーはそれなりの性能を有してはいるが、空中に線路があるわけないし、ロケットのように飛ぶような姿をしていない。と言うことは宇宙列車ではないな」

「想像できないな」

*

特急イリ・ライナーが草原を疾走する。遠くから同じく特急ウク・ライナーが向かってくる。やがて両特急はすれ違わず。ところが線路脇で待ち構えていたソシア軍戦車が戦車砲を特急ウク・ライナーに向ける。戦車が揺れる。戦車砲が火を噴いたのだ。ところが砲弾は特急ウク・ライナーの近くで跳ね返される。両特急は何事もなかったようにすれ違っていく。このとき両特急のパンタグラフから強烈な光線が発射される。この光線を受けた戦車は一瞬のうちに蒸発する。両特急はすれ違って遠のく。何事なかったように草原に静かな光景に戻る。

この様子の一部始終を宇宙戦艦から眺めていた榊と加藤がうなる。

「線路というか軌道がシールドされているに違いない」

直感的に加藤が断定する。

「さすが、加藤。俺もそう思う。レールだけではなく架線も川を渡る鉄橋もトンネルも駅も枕木も全部シールドされている」

「だからイリは特急イリ・ライナーで問題なく移動できるのか」

「そうだ」

「問題はこのような鉄道網、列車を誰が作ったかだ」

「ノロ」

榊が加藤に頷く。

「こんなこともあるかとノロはシールドされた鉄道網、ライナーシステムを構築していた」

加藤が榊に笑顔で応える。

「想像だろ？」

「夢想だ」

「でも現実だ」

二人は地球にイリを残してノロの惑星に戻る。ノロがイリを完璧に守っていると確信する。